

## 日本語学習者の口頭運用レベルと聞き手配慮要素の使用 —OPI データをもとに—

宮永 愛子（関西学院大学日本語教育センター）

本研究の目的は、口頭運用能力が高いと判断される日本語非母語話者の発話の特徴づける要素にはどのようなものがあるのかを明らかにすることである。口頭運用能力の高い非母語話者の発話の特徴が明らかになれば、日本語の会話指導の現場において、体系的な指標を示すための一資料を提供することになると考えている。

本研究では、松田・宮永・庵（2013）に従い、超級話者の談話の特徴づける要素を、「談話内容の質に関わる部分」と「聞き手配慮に関わる部分」に大別したうえで、聞き手配慮要素の中でも、特に、試行的提示、フィラー、終助詞という3つの要素に注目し、これらの要素の使用に関して、超級話者にはどのような特徴が見られるのかを分析した。

分析データとして用いたのは、ACTFL-OPIの枠組みで収録された、国立国語研究所による「日本語学習者会話データベース」である。この中から中級9名、上級9名、超級9名の計27名のデータをランダムに選び、データの全体像を把握するために、量的分析を行った上で、特徴のある要素に関して、どのような使われ方がなされているのかを質的に見た。まず、量的な分析からは以下のことが明らかになった。(1)「あー」「こう」「いや」「もう」「まあ」「なんか」「そうですね」に関しては、中級から超級になるにつれて、使用頻度が高くなった、(2) 試行的発話として、「というか」「いいのか」「といいますか」「というんですか」「というんでしょうか」などを用いた表現が、中級では全く見られず、上級から超級に上がるにつれて出現数が増える、(3) 終助詞を含む表現として、「んですね」「んですよ」「んですよ」が、中級ではほとんど見られず、上級から超級に上がるにつれて、出現数が増える。

また、質的分析で、明らかになったのは以下の3点である。(1) 超級話者は、上級と比較して、より多様なフィラーを使用しながら、会話相手をひきつけながら臨場感のある話し方をしている、(2) 試行的発話や言い換えをしながら、聞き手の理解に合わせて表現を選ぼうとしている、(3) 終助詞「ね」や多様なフィラーを用いて、聞き手の理解を確認しながら、発話を組み立てている。

以上のことから、上級から超級の話者になると、会話者間の知識状態を確認しながら、より聞き手を意識した話し方ができるようになるのではないかとことを指摘した。

### 参考文献

松田真希子・宮永愛子・庵功雄（2013）「超級日本語話者の談話特性—テキストマイニングを用いた分析—」『国立国語研究所論集』第5号, 43-63.